

「郷土史家 伊佐早 謙」展

会期 令和3年1月29日（金）～3月24日（水）

会場 ナセ BA 中2階 先人顕彰コーナー

主催 公益財団法人米沢上杉文化振興財団

協力 山形大学附属博物館

1. 第二代館長 い さ はやけん 伊佐早謙

伊佐早謙は、安政4年(1858)、上花沢信濃町（現 東1丁目）

に生まれ、興譲館提学かたやまげんさいの片山弦斎（仁一郎）の門下で漢学を学びました。明治7年（1874）、満16歳の時より置賜郡高嶺小学校（現 飯豊町）に勤め、以来、松岬学校、西置賜郡小出小学校（現 長井市）、山形県師範学校（山形大学の前身の一つ）、明治17年（1884）には米沢中学校で教鞭をとります。漢学や漢詩を教えながら、また一方で上杉家、米沢藩の先人たちの史書編纂を進め、明治23年には上杉家記録所の総裁となり、『奥羽編年史料』等の編纂に力を注ぎます。



伊佐早謙

明治40年（1907）、伊佐早は、後に初代図書館長となる松山亮らとともに「図書館財団設立趣意書」を提出し、藩校 興譲館から引き継がれてきた貴重な資料群の保管を主たる目的として図書館の設立を望み、翌々年、直江兼統が「禅林文庫」を創設した由緒ある法泉寺境内に初代図書館が開館しました。開館時の蔵書は、興譲館財団から寄贈された貴重書（珍書）955冊や和漢書11,645冊、新たに購入した和漢書935冊、洋書65冊の計13,600冊でした。この興譲館財団から寄贈された書籍群は、藩校 興譲館に伝来したものが主なもので、その蔵書には「米沢蔵書」（藩庫に置かれていた書籍の蔵書印）、「麻谷蔵書」（藩の江戸中屋敷である麻布邸の蔵書印）などの蔵書印が捺されています。

大正元年（1912）に二代目館長となった伊佐早は、書籍の収集に努めますが、大正6年と8年に米沢は二度の大火に見舞われます。法泉寺境内の文殊堂も焼失しますが、隣接する図書館は火難をかわりて逃れます。貴重書焼亡の危機を感じた伊佐早は、頑丈な石倉の珍書蔵の建設を計画します。全国から寄附を集め、大正12年（1923）に珍書蔵は完成しますが、伊佐早が守ってきた貴重書は、伊佐早没後も、太平洋戦争下においては塩井村等に疎開させるなど、現在当館に受け継がれている書籍は伊佐早はじめ先人たちの尽力があって守られてきたものだと思います。

昭和3年（1928）、伊佐早は上杉鷹山の彫像製作の資金援助のため、酒田の本間家を訪れた際、にわかに発病、昭和5年4月に図書館長を辞すと、同年6月5日、歸らぬ人となります。遺言により伊佐早の蔵書である「林泉文庫」は上杉家に寄贈され、その大半である1万1,240冊が昭和13年

(1938)に当館に寄託されます。その際に作成された『林泉文庫寄蔵書及書目』には「上杉本邸所蔵目録」分、「市立米澤図書館寄託書目録」分、「伊佐早家保留書目録」分と三分割されたことが記されています。昭和28年(1953)に、「市立米澤図書館寄託書目録」分の中で郷土米沢に関する郷土資料706タイトルを当館が購入、他に山形大学附属図書館、米沢女子短期大学図書館(現 山形県公立大学法人附属図書館)、白鷹町の瑞龍院龍門図書館が購入しました。

また『林泉文庫蔵書及書目』の「上杉家本邸所蔵目録」分は現在、米沢市上杉博物館所蔵の上杉文書の中に収められています(上杉文書は平成11年まで米沢図書館に収蔵されていました)。

2. 郷土史家として

明治23年(1890)、伊佐早は上杉家記録所総裁となるとますます精力的に上杉家及び郷土の史書編纂に注力しました。同年に出版された『米澤藩衰弊録』、翌年の『米沢稽古叢書』をはじめとして、米沢藩に関することのみならず、『故伊佐早謙先生閱歴』に「実に先生畢生の事業にして、全心血を注がれたる一大著述」と記された『奥羽編年史料』(全53冊)は、文治元年(1185)から文禄4年(1595)に至る奥羽の歴史史料を編纂したものです。その起筆は明治14年(1881)9月から、明治38年(1905)9月までの24年間に及びました。

大正4年(1915)に発刊された『編年西村山郡史』は、和銅4年(711)に出羽国建国の進言をしたことから明治11年(1878)の西村山郡設置までの西村山の郡史を書き著したものです。「天・地・玄・黄」の4冊1秩からなりますが、伊佐早がなぜ西村山郡史の編纂に関わったのか、その経緯は不明です。明治40年(1907)から郷土史に関する講座を各地で開き、大正5年(1916)に山形県自治講習所が設立されると毎月郷土史の講座を3年に亘り開校していた、と『故伊佐早謙先生閱歴』にあることから、各地で郷土史家としての活動をしていたことが関係しているのかもしれませんが。

大正9年(1920)に全4巻で発行された『山形縣史』は、伊佐早が編纂主任を務めました。『編年西村山郡史』と同様に、出羽国建国から明治元年までの1150年余りを編年体で史料中心に記されています。

『奥羽編年史料』、『編年西村山郡史』、『山形縣史』からみられるように、伊佐早の史書編纂は、緻密な史料収集に基づく、徹底した実証主義的な記述方法でした。『奥羽編年史料』執筆時より、帝国大学史料編纂掛(現 東京大学史料編纂所)収集の史料の閲覧をし、中央の歴史学者と交流していましたが、それゆえに、史資料を書き残していくことに努め、または図書館で保管する重要性を感じていたのではないのでしょうか。



「奥羽編年史料」53冊

さて、当館には伊佐早手書きの原稿『米沢市史(稿)』1～7冊、『米沢市詩稿』が残されています。前者は上長井村目録等の史料を筆写したもの、後者は伊達時代から米沢藩初期までの歴史を書き記したものです。旧版『米沢市史』は昭和19年(1944)に出版されましたが、その序には大正初期に伊佐早に編纂を依頼したことが書かれています。しかし、大正の米沢大火で原稿を失い、その後の伊佐早の死去によって編纂を中止、昭和9年(1934)に改めて市史編纂の計画が立てられたとのことです。残念ながら伊佐早の『米沢市史』は日の目を見ませんでした。収集した蔵書、「林泉文庫」は今後も当市のみならず全国的に貴重な資料群として研究に資することでしょう。

3. 伊佐早の漢詩・石碑

伊佐早は神保蘭室（江戸中期の蘭学者）や細井平洲（江戸中期の儒学者、上杉鷹山の師）等の詩作にも親しみ、自らもまた詩作を楽しみとしていました。伊佐早の処女出版は、明治12年（1879）の伊佐早幸吉名義の『鶴城詩集』でした。これは、上杉謙信や上杉治憲（鷹山）などの藩主、直江兼統などの米沢藩の家臣たちの漢詩集をまとめたものです。序に斎藤篤信（山形県師範学校の校長）、宮島昇が記しています。晩年の大正14年（1925）には『恩栄紀詩』、翌年には『樅軒稿』を出版します。明治41年（1908）9月、皇太子明宮（のちの大正天皇）が山形県を行啓し、米沢にて川中島模擬戦をご覧になられ、その説明を伊佐早が行いました。また大正14年（1925）、摂政宮^{みちのみや}迪宮（のちの昭和天皇）に伊佐早が山形県を代表する史学者として講義したこと、それを「真に生前身後の光栄」と感激して、漢詩を作成、『恩栄紀詩』として出版しました。『樅軒稿』は、伊佐早が70歳の時に出版した詩集で、自詩を「朴拙」とし世に出すべきものではないと序で記していますが、長男の信の勧めによって出版したとしています。詩は、自らの人生を振り返るように、恩師中村正直に宛てたものや家族に向けて、また大正13年（1924）に沖縄調査の際に首里城に登ったときの詩などが収められています。この沖縄調査では、現在も「林泉文庫」に収められている『御詩和韻集』や『御製併和詩』、『国学槐詩集』（米沢善本）等の収集をしています。その中で『香草斎詩註』（林泉文庫332）にある貼紙には「書室常置 樅軒老人」とあり、林世功（琉球王国の官僚）の遺本として宝とすべきものであるとし、自室の書齋に常置したと書かれています。

さて、伊佐早は米沢市内外の石碑に漢文を残しています。著名なものは初代図書館が創建された法泉寺境内に残る「創立図書館碑」ですが、ほかにも明治32年（1899）9月「西方君記念碑」や明治35年4月「鈴木氏製糸碑」、大正8年9月「八木朋直翁生誕之地碑」等確認されています。



創立米沢図書館碑

林泉文庫とは

伊佐早が生涯をかけて収集した蔵書「林泉文庫」は、住んでいた林泉寺町にその名を由来します。昭和13年（1938）に上杉家から当館に寄託された際の点数は、1万1,240点にも及びます。そこには、昭和60年（1985）に米沢市指定文化財「米沢善本」に選集された『因学紀聞』や『山谷詩集注』などの漢籍類をはじめ、百人一首の注釈書である『百人一首抄』等も含まれています。

また、平成25年（2013）に沖縄県うるま市立図書館の調査により改めて所在が確認された蔡大鼎¹旧蔵の『御詩和韻集』（林泉文庫330）や蔡德懋²旧蔵の『御製併和詩』（林泉文庫331）等は、「林泉文庫」にのみ所蔵されている大変貴重な書籍です。伊佐早は大正13年（1924）に、米沢藩最後の藩主で第二代沖縄県令となった上杉茂憲^{うえすぎもちのり}の事績調査のため沖縄を訪れ、この調査の中で琉球・沖縄に関する資料を収集してきたとみられています。

¹蔡大鼎（さいたいてい 1823～？）江戸期末から明治初期にかけて活躍した琉球の官僚、詩人。和名 伊計親雲上。代表的な詩集に『北燕遊草』、『伊計村遊草』等。

²蔡德懋（さいとくぼう 1801～1866）蔡大鼎の父。道光26年（1846）、都通事となる。

先人顕彰コーナー「郷土史家 伊佐早謙」出品目録

NO.	資料名	編著者	年代	サイズ(cm)	
1.第二代図書館長 伊佐早謙					
1	図書館財団設立趣意		明治 40 年(1907)10 月	—	パネル
2	図書館日誌		明治 42 年 (1909)10 月 7 日	23.1×16.1	
3	初代図書館		—	—	パネル
4	創立米沢図書館碑 拓本		明治 44 年 7 月(昭和 52 年 8 月採拓)	179.5×77.5	パネル
5	米沢大火惨状全景		大正 6 年(1917)5 月 22 日	—	パネル
6	珍書文庫設立文 (「珍書文庫建設寄附名簿」)		大正 10 年(1921)10 月	27.0×18.7	
7	珍書文庫設立出資金依頼状		大正 11 年(1922)	19.6×26.3	
8	珍書文庫設計図		大正 11 年頃	55.0×79.0	
9	林泉文庫寄蔵書及書目		昭和 13 年(1938)10 月	23.5×16.2	
10	林泉文庫郷土図書目録		昭和 15 年(1940)12 月 3 日	24.6×16.9	
2.郷土史家として					
11	『米沢藩衰弊録』	伊佐早謙/編	明治 23 年(1890)	18.2×12.7	
12	『米沢稽古叢書』一	伊佐早謙/編	明治 24 年(1891)	22.7×15.2	
13	『奥羽編年史料』	伊佐早謙/編	明治 38 年(1905)	26.8×18.8 〈箱〉縦 61.5×横 46.2×奥行 31.8	
14	『稿本 清覧録』	伊佐早謙/著	明治 41 年(1908)	22.7×15.5	
15	『山形縣史』巻一～四	山形縣内務部、伊 佐早謙/編纂主任	大正 9 年(1920)	22.5×16.0	
16	米沢市詩(史)稿』一	伊佐早謙/著	大正初期	29.0×20.7	
17	『米沢市史(稿)』一～七	伊佐早謙/著	大正初期	25.3×16.8	
3.伊佐早の漢詩・石碑					
18	『鶴城詩集』	伊佐早謙/撰	明治 12 年(1879)	17.2×12.2 / 18.5×12.4	
19	『恩栄記詩』	伊佐早謙/著	大正 14 年(1925)12 月	22.4×16.2	
20	『樅軒稿』巻一・二	伊佐早謙/著	大正 15 年(1926)	24.4×16.2	
21	『片子大堰紀年碑』	伊佐早謙/撰文	明治 45 年(1912)4 月	—	パネル

《参考文献》

青木昭博「市立米沢図書館の蔵書と現在の興譲館本」

(『米沢藩興譲館書目集成』4巻、ゆまに書房、2009年)

新宮学「近代山形最初の郷土史家、伊佐早謙の仕事」(『西村山地域史の研究』、第36号、2018年)

沖縄県うるま市教育委員会編『蔡大鼎「伊計村遊草」等調査報告研究事業研究成果報告書』(2015年)

市立米沢図書館編『米沢図書館 100 年』(2009 年)

山形県立図書館編「故伊佐早謙先生閱歴」(山形県図書館協会、1930 年)